

学芸員ラップバトル

守安 収

去る1月9日の成人の日、私どもの館で「美術館学芸員ラップバトルトーナメント」が開催されました。この企画は音楽イベント制作会社遊覧座(東京)さんからの提案を受けて実現したもので、県内4館の学芸員が各人それぞれの美術への愛をラップでぶつけ合いました。どうやらふだん真面目な顔をして難しそうな話をする〈学芸員〉と〈ラップ〉とのミスマッチ(本当はマッチするし、「推し」のない学芸員はいない。ただ慣れていないだけ)が関心を集めたと見え、180人定員で入りきれないほどの参加者があり、素人のラップもプロのMCのおかげで拍手喝采、大盛況でした。会場配布のアンケートのほとんどに大変満足、満足の〇がつき、再開希望との記述が多々ありました。催し的一端はYouTubeで配信予定です。▼私は勝者である林原美術館H氏(着流し姿で能面を被りその上にメガネを着けるという面妖な恰好で登場)にチャンピオンベルトを渡しましたが、そのベルトは同館エントランスにて公開中。地元だけでなく東京のテレビ局が朝の番組で放映したこともあり、しばらくして東北の個人の方から館長宛のお手紙を頂戴しました。「大英断」とのお褒めの言葉に続いて「頻繁に開くと美術館としての知性が疑われる」ので「1年に一度くらいが適当」とのご提言です。それには「なるほど、そうだよね」と頷くほかありません。ともあれ、今回は遊覧座さんのご厚意に甘えたところが大きく、息の合ったMCと機を見て敏な音響担当スタッフの存在に救われました。ただ、学芸員という職に就いた以上、ラップに限らず自分の「推し」を究め、いろいろな形や手段で伝えていこうとする努力を怠ってはならないことは確かでしょう。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
https://okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいようお願いいたします。

編集後記

中西ひかる

徐々に寒さもやわらぎ始めて、ところどころ春の気配を感じられるようになってきました。さて、この度で140号目を迎えた本誌ですが、今年は美術館も35周年という節目を迎えました。初夏には周年記念の展覧会も予定しており、前回の30周年記念展とはまた違う切り口で、皆さまに岡山ゆかりのコレクションをお楽しみいただけるよう鋭意準備を進めております。これから少しずつ、次年度の展覧会やイベント情報もお知らせしてまいりますので、35歳を迎えた岡山県立美術館へ、今後ともぜひご期待いただけたらと思います。

収蔵品の紹介 Vol. 11

小野耕石《Hundred Layers of Colors》(部分)
平成25—26(2013—14)年9点のうち
スクリーンプリント・油性インク・紙
(各)75×90cm

ゆかいな骸骨

福富 幸(副管理者)

前号では、特別展「名古屋市美術館コレクション エコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンス」を取り上げ、メキシコ人作家ホセ・ガダルーペ・ポサダの描く骸骨の風刺版画を紹介しました。展示室にはドン・キホーテに扮した骸骨や自転車を取り回す骸骨などユーモラスで楽しい作品がありました。メキシコ人は、古くアステカ文明以来の死生観を受け継ぎ、生と死は親しいものとして捉え、毎年11月に開催される「死者の日」の祭りでは、祭壇を花や蠟燭、骸骨の形をした砂糖菓子や置物などで賑々しく飾り、華やかに仮装してパレードを繰り広げます。先祖を迎えて一緒に楽しむ、生が死者とともにあることを象徴する骸骨です。(参考までに、少年が死者の国を彷徨う映画『リメンバー・ミー』にも取り上げられています。)これまで知り得なかったメキシコの美術や文化に興味を抱かせるものでした。

骸骨といえば、和田誠(1936-2019)さんが2005年に当館で開催した特別展「燐票大展览会—マッチラベルのシンセカイ—」のために描き下ろしたイラストレーションも骸骨でした。この展示会は、岡山市内の収集家のご遺族から約75000点ものマッチラベルのコレクションをご寄贈いただいたことを記念に開催したもので、明治から昭和期に制作されたマッチラベルを展示するとともに、和田さんら当時存命であった37名の現代作家の方々にご協力を仰ぎ、館蔵作品と合わせ、40点の新作マッチラベルを制作、新旧ラベルの競演をお楽しみいただきました。わずか5×3cmほどの小さな空間にどんなストーリーが展開されるのか、趣向を凝らした多彩な意匠が見どころで、和田さんの新作マッチラベルは、臙脂色の背景色にたばこをくわえる骸骨とマッチで火をつけようとしている骸骨でした。マッチだからたばこ？—たばこやマッチの社会における位や考え方は時代とともに変わりましたが、1960年発売のロングセラーたばこ「ハイライト」の、和田さん指定のブルーの背景色に白い「hi-lite」の文字が浮かぶデザインは、和田さんの初期の代表作としてよく知られています。和田さんはたばこ



和田誠、他《マッチラベル》(額装) 2005 岡山県立美術館



和田誠 新作《マッチラベル》原画 2005 ©Wada Makoto



『がいこつ』2005 ©Wada Makoto



『サンタのびっくりプレゼント』2005 ©Wada Makoto

「ピース」の広告も手がけていますし、元々愛煙家でもあったことからたばこはともかくとして、なぜ骸骨？—企画としてどちらが後先か定かではありませんが、同年10月に絵本『がいこつ』(谷川俊太郎詩、和田誠絵、教育画劇)を発売。絵本のがいこつは、大好きな女の子と一緒に縄跳びをしたりブランコに乗ったり、がいこつだから死ぬのも怖くないと嘯く、少しシュールな詩に和田さん独特のデフォルメされたイラストレーションと明るい色彩が印象的です。この絵本では多色刷り版画のように1場面ごとに4枚の絵を描き、印刷用の赤、青、黄、黒という4色のインクごとに版を作り、印刷を重ねるといった手間のかかる手法が取られています。大人骸骨と子供がいこつ、和田さん69歳の仕事です。

骸骨が主人公ではありませんが、同じ年、和田さんは岡山でもうひとつ仕事をしています。オハヨー乳業の依頼で絵本『サンタのびっくりプレゼント』を制作、こちらは文、絵ともに和田さんによるものです。販促も然る事ながら、蒜山高原で育てられるジャージー牛、酪農への理解と関心を持ってもらいたいと企画されたものでした。サンタのプレゼントとあるように、応募者(祖父母や親)から孫や子へプレゼントする世界に1冊だけのオリジナル絵本ということで、扉には贈られる孫や子の写真と名前、贈り主からのメッセージ、巻末には和田さんからのメッセージも付きました。一部小学校や図書館にも寄贈されましたが、非売品であることから、かなりレアな絵本です。

骸骨といえば骨、骨といえばカルシウム、カルシウムといえばミルク、ミルクと言えばジャージー牛…和田さんが当時そんなことを考えていたかどうかは存じませんが、連想をつなげてみました。

こうした岡山とのご縁もあり、このたび没後初となる回顧展「和田誠展」が当館へ巡回することになりました。幼い頃から絵が好きで、似顔絵や4コマ漫画を描いて中学生で既に雑誌に連載を持つなど異彩ぶりを放つ和田誠さんは、広告、CM、ポスター等のグラフィックデザイナーとしてのみならず、装丁、作詩、作曲、映画等、さまざまなジャンルで活躍しました。本展では約3000点の作品資料により和田誠さんの全貌に迫ります。きっと「あっこれ、見たことある！」に出会えると思います。

【特別展】「和田誠展」(会期:2023年3月24日~5月7日)

学校と美術館の共働事業

教育普及展 みんなの参観日「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」

岡本 裕子(主任学芸員)



1月19日に行われた公開授業の様子/「みんなの参観日」会場(地下1階屋内広場)

2019年度からスタートした《みんなの参観日「図工の時間・美術の時間—子どもの学び—」(以下、「みんなの参観日」)》は、今年度4回目を迎えました。みんなが小学校の授業でしている「図工の時間」、みんなが中学校の授業でしている「美術の時間」を、みんなが参観できる展覧会が「みんなの参観日」です。図工や美術の時間の中で大切にされている子どもの思いや主題、そして先生の支援や子ども同士のかかわりを切り口にしたすべての子どもの学びを美術館に展示し、みんながそれを参観することができる場です。

「まず一步、そして次の一步へ」を合言葉にスタートした1年目。新型コロナウイルス感染症が世界的に拡大し始め、「コロナ禍でも、コロナ禍だからこそその授業者の工夫と子どもの学びの実際を展示(発信)することに意義がある」と考えて開催に踏み切った2年目。新型コロナウイルス感染症第6波と同時にまん延防止等重点措置が適用される中で後期展示を迎えることになった3年目。公開授業やシンポジウムなど新しい試みを企画し、年齢も立場も異なる様々な人々が交流する場としての「みんなの参観日」をより意識してのぞんだ4年目。参観者のコメントをとおして4年間を振り返ってみます。

「あまり期待せずに見始めたが、子どもたちやそれに関わる大人たちの熱量のすごさに涙が出るほど胸を打たれた」「小学生の娘は普段アンケートを書いたりはないのですが、今日は私よりも先に書いていました。きっと感じるものがあったのだと思います」「図工・美術の授業を含めて子どもの創造活動は、結果が問題ではなくその過程こそに意味があると考える」「美術教育とは、作品や手法などの表面的なことを教えるのではなく、作品の後ろに広がる人間や社会を学ぶことにも繋がるということを知った」「過程や感想、ねらいなどを言語化することで、自分を知るのもアートの役割としてある

ことを、子どものワークシートで実感した」「美術館が公的な存在であり、公的な教育にもつながっていることは、自然な姿であると思いますし、そのようにある岡山県立美術館のありがたさに思い至ります」「コロナ禍で保護者が学校を訪問することが減っています。子どもたちがどのような表情で学校生活を楽しんでいるのか知る機会が少ないため、美術館での展示をとおして、生の姿をみることができました。子どもたちはどんな状況下でもたくましく成長しているのだと改めて知ることができました」「子どもたちは、今の社会や友だちとのことを大人が思う以上に考えていることがわかりました」「公開授業を見学させていただきました。子どもたちのリアルな学びの場をみられることがとても貴重でした。美術館で“よそゆき”にならない雰囲気づくりが素晴らしかったです」「子どもの頃の図工の時間を懐かしく思い出しました。その頃よりももっとみんなが優しく、生き生きしているのを感じ嬉しくなりました。子どもたちの感想もみんなで作るすばらしさや喜びを感じていましたね。素敵な授業、作品をありがとうございました」「この空間が夢に満ちているように感じます。未来の明るさは、子どもたちの中にありますね」

これまでに寄せられた参観者のコメントには、地域や社会のあたたかいまなざしが溢れています。学校と美術館の双方向のやり取りを重視し、互いに共感しつつ高め合うことができる場を目指す「みんなの参観日」が、地域や社会に学校を開く、そして地域や社会が学校を知る一つの機会になっていれば幸いです。そして、社会教育施設という側面を持つ美術館が、学校と共働することをとおして《もの》と《ひと》と《こと》をつなぐ結節点になり、地域や社会のあたたかいまなざしを涵養する場になる可能性があれば幸いです。

没後100年

林皓幹遺品から見えてきたこと

鈴木 恒志(学芸員)

林皓幹は、岡山市出身の日本画家。東京美術学校で学び、そのまま東京画壇を中心に活動していた人物である。生まれは明治27(1894)年で、院展の革命児として活躍した速水御舟と同年。御舟はその挑戦的な画業から生前様々な批判を受けつつも、画壇に新風を巻き起こす人物として将来を嘱望されていたが、わずか40歳でその生涯を閉じた。一方で皓幹はというと、それより早く大正12(1923)年30歳で亡くなっている。展覧会への出品も数えられるほどで、東京美術学校を卒業した大正9年の帝展に1回、同11年の平和記念東京博覧会に1回、そして詳細の分からない信濃美術展覧会に1回出品が確認されるのみである。各展覧会の批評を見ても、皓幹について言及したものは一切なく、画壇での評価は不明と言わざるを得ない。果たして、彼はどこを目指していたのであろうか。

当館では、皓幹のご遺族より受贈した遺品を大量に所蔵している。作品・下絵・模写に加え、画材・印章・賞状・卒業証書、読んでいた書籍まで、膨大な資料が存在し、彼の画業はほぼ全てが当館にあるといっても過言ではない。没後100年を迎えた本年に、改めて遺品類を悉皆調査している最中だが、その中で見出された皓幹の興味深い一面について、ここで少々触れてみたい。

これまでの調査で再発見された資料のうち、特に注目したいのが文学雑誌『文芸倶楽部』の口絵の数々である(図1)。本誌は明治28年に博文館が創刊した雑誌で、樋口一葉や泉鏡花といった当時の著名な小説家たちが寄稿し大変な人気を博していたものである。それらの巻頭を飾った口絵には、大正3年まで木版多色摺の版画を綴じ、絵師には水野年方やその弟子の鑄木清方、あるいは東京美術学校で教鞭をとっていた川合玉堂・寺崎広業らを起用するなど、相当に力を入れていたことが窺える。口絵の画題は、当初巻頭小説の内容に合わせたものであったが、明治35年以降は季節ごとの美人画となった。皓幹が収集した全95枚もそのほとんどが美人画で、彼の興味関心が垣間見えて面白い。

当館所蔵の皓幹作品には、《隠蓑(美人図)》という美人画がある(図2)。さっぱりとした色使いの格子戸や女性の身体に比して、鮮やかな色彩で描かれる着物が際立って美しい。本作を含め皓幹の美人画は数点あるが、いずれも彼の生きた大正時代の女性たちを描いたもので、なかには彩色の途中で終わっている試作的なものもある。皓幹の展覧会出品作はいずれも歴史的画題・伝統的画風を主としているが、前述の『文芸倶楽部』口絵の収集やこうした大正風俗への挑戦の様を合わせて考えると、彼の歩まんとした道の一つが見えてくるようだ。すなわち、東京美術学校で卒業制作期に皓幹を指導した松岡映丘が《千草の丘》で見せたような、当世風俗と大和絵の融合を、皓幹もまた打ち出していたのではないかと思われるのである。

ここで触れたのは皓幹のほんの一側面に過ぎず、彼の遺品にはいまだ多くの謎と魅力が残されている。彼の道が絶たれて100年。弔いの意も込めて、今後も調査を続けたい。



図1:
寺崎広業《新緑》
(『文芸倶楽部』9巻7号口絵)
明治36年
図2:
林皓幹《隠蓑(美人図)》
大正時代

図1

図2

新収蔵品紹介

File 23

宮忠子《白いたおやかな枯木》
廣瀬 就久(主任学芸員)



1976 墨、麻紙 83.0×57.5cm

麻紙に墨で描かれた作品。小山の頂に、幹が白くて枝分かれする枯木が一本ある。後ろには林が、前には草むらがある。日光が降りそそぎ、しなやかな様相の枯木と対比する形で、樹木が茂り、草原は勢いよく生長する。

宮忠子(1931-2022)は児島郡灘崎村(現:岡山市南区)に生まれた。旧姓は森である。1949年に山陽女子高等学校を卒業する。その後上京して53年に武蔵野美術大学を卒業した。1年から3年は西洋画科に、4年は彫刻科に在籍している。そして油彩画家である宮俊彦(1928-1994)と結婚して54年に帰岡したあと、一男三女を育てた。66年に画業復帰して、岡山と東京の画廊で作品を発表する。69年から山陽学園短期大学幼児教育科、そして山陽女子中学校・高等学校で、美術の非常勤講師として勤務した。

洲之内徹が経営する東京画廊(東京)で開催された「四方田草炎素描展」(74年)に感銘を受けて、油彩から墨へと画材を変えた。2014年に『宮忠子画集 風について』(求龍堂)を出版する。美術館での初個展として、『「岡山の美術」特別展示 岡山の作家☆再発見 I 宮忠子展』(岡山県立美術館、15年12月17日~16年2月7日)を開催した。この展覧会を契機として、16年度に上記展出品作15点の当館への寄贈があった。ついで21年度に寄贈された《白いたおやかな枯木》の初出品は東京画廊での個展

(76年)であり、15点とともに上記展出品作である。

作家によると、数本の面相筆と1本の蒔絵筆を使用すること。緻密に細い線を描くので、穂先が割れてしまう場合に備えて、数本の面相筆を準備しておく。紙、筆、墨とともに、製作用の大きな台が必要である。細部を観察するため双眼鏡を使用する。室内でも屋外でも制作する。室内の場合は自宅と勤務地であり、屋外の場合は自宅や勤務地の外側、そして岡山市内である。制作の進み具合は、1日で7~8cm四方。作品が大きくなるにつれて、作業時間は長くなるとのこと。

70年代から、ごく近くの風景や植物を、墨を使いながら描いた。移ろう四季、光と影、吹く風、滞る空気と水の湿りから自然の姿を見ている。独自の道を歩んだ宮は22年10月4日に逝去した。東洋絵画の水墨画、また西洋絵画の素描と比較するなど広い視点で、宮忠子の作品を紹介していきたい。

参考文献:

- ・廣瀬就久 『「岡山の美術」特別展示 岡山の作家☆再発見 I 宮忠子展』(展覧会小冊子) 岡山県立美術館、2015
- ・廣瀬就久 「宮忠子展について」『岡山県立美術館紀要』第9号、2019、口絵1p.26-31

展覧会スケジュール

3月
March

2月3日|金| - 3月12日|日|

【特別展】

名古屋市美術館コレクション
エコール・ド・パリとメキシコ・ルネサンス

名古屋市美術館の誇る「エコール・ド・パリ」と「メキシコ・ルネサンス」のコレクション。本展では、モディリアーニやユトリロ、シャガールといった、1920年代を中心にパリで活躍した「エコール・ド・パリ」の芸術家たちの作品に加え、視覚的な力強さと明確な社会的メッセージを持つ、メキシコ近代美術である「メキシコ・ルネサンス」の作品をあわせて展示し、20世紀前半のパリとメキシコを舞台に展開された華やかで力強い多彩な美術の世界を紹介します。

*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

4月
April

3月24日|金| - 5月7日|日|

【特別展】

和田誠展

イラストレーター、グラフィックデザイナーとして広く知られる和田誠(わだ・まこと/1936-2019)は、装幀家、映画監督、エッセイスト、作曲家、アニメーション作家、アートディレクターとして多彩なジャンルで活躍した。本展は膨大で多岐にわたる和田の仕事の全貌に迫る没後初の回顧展で、生前和田が岡山の企業の仕事や当館での企画展に参画したことから実現した展覧会。昭和、平成の時代を象徴するようなデザイン、時代を超え人々の目を惹きつけるデザインの魅力を紹介する。

3月25日|土| 18:00-18:30

美術の夕べ 「和田誠展をみる」

講師 福富幸(副管理者)

会場 地下1階展示室 ※要観覧券

5月
May

5月19日|金| - 7月2日|日|

【特別展】

岡山県立美術館35周年収蔵品展
CORRELATION—交流と継承

当館は2023年に開館35周年を迎えます。この節目を記念して、「岡山ゆかり」をキーワードに今まで収集してきた作品をジャンルを横断しながら、様々な「関わり」や「つながり」に着目した切り口で紹介いたします。(前期:5月19日-6月11日/後期:6月14日-7月2日)

6月
June



収蔵品の紹介 Vol. 11

小野耕石《Hundred Layers of Colors》

平成25-26(2013-14)年

9点 スクリーンプリント・油性インク・紙(各)75×90cm

見る位置や照明の角度により色彩が移り変わる9点の作品は、何れも無数の点(ドット)を描いた版表現により構成される。近づいて見ると、スクリーンプリントの技法で同じ位置に何十回も色相を変えながら刷り重ねられたインクの層が、カラフルな柱となって立ち上がるミクロの立体構造に目を奪われる。(古川)